ほろ酔いルーシー Break Time

esora creations

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ほろ酔いルーシー　Ｂｒｅａｋ　Ｔｉｍｅ

【Ｎコード】
Ｎ８３５３Ｙ

【作者名】
ｅｓｏｒａ　ｃｒｅａｔｉｏｎｓ

【あらすじ】
ほろ酔いルーシー　番外編

（前書き）

本作は『ほろ酔いルーシー』の番外編ですが、そのまま読んでいただいても差し支えありません。
本編から読みたい方はｅｓｏｒａ　ｃｒｅａｔｉｏｎｓのホームページからどうぞ。

ｈｔｔｐ：／／ｅｓｏｒａ２０１１．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｉｎｄｅｘ．ｈｔｍｌ

○

「キスしよか」

今日はいつもとは少し違う。

何が違うのかというと、帰りは寄り道をしてものすごく遠くの小さな川の小さな土手の上をふたり並んで歩いているってこと。

本当に遠かった。

どれくらい遠いかっていうと、自分の家から目一杯の速さで自転車を漕いでも二十分以上かかるほど。それくらい遠くて辿り着くのにやたらと時間がかかったせいで、夕焼け小焼けを通り過ぎて空は紺色に染まり、辺りは真っ暗になっていた。一番星どころか十番星くらいまで見えてきている。

街灯のない土手の上は足元が見え辛くて、おまけに砂利道だからすごく歩きにくいから、あっくんと手を繋いで慎重にゆっくり足を踏みしめて歩いてく。

そして手を繋いで隣で歩くあっくんの様子がいつもと違う。お昼まではいつも通りヘラヘラした顔でおしゃべりしてたのに、お昼を過ぎるとちょっとずつ様子がおかしくなっていた。いっしょにおしゃべりしても話が弾まない。いろいろと言い淀んで会話が途切れる。私のことをチラチラと見てくる癖に「なに？」って訊いたら、顔を逸らして「なにも」って素気なく返す。

いっしょに帰る頃にはますますそわそわしていた。それでも、私が「どうしたの？　なんかヘンだよ？」って問い質しても「イヤ、別に。なんでもないよ」と、やっぱりそわそわしながら返してくるだけだった。

どう見ても何でもなくない。また私に隠し事をしているに違いない。あっくんはいつもそうだ。この前だってお揃いのリングをいきなりプレゼントしてきて私を驚かせたし。

まあ、あれはこっそりやらなきゃダメなもんだけど――

だけど、きっとまた何か企んでるに違いない。そう思っていたら今度は突然、「帰りに河川敷を歩こう」なんて言い出して。

で、今実際ふたりで歩いているわけだけど…。

あいかわらず話が弾まないから、ただ黙々と砂利道をジャリジャリと音を立てながら歩いていると、唐突にあっくんが“そう”切り出してきた。

「キスしよか」

ちょっとコンビニ寄らないか？　みたいな軽いノリで声をかけてくるもんだから、足元を確認しながら歩く私も軽く「そうだね」って返しそうになって、慌てて咳き込んだ。

キス？　口づけ…だよね？　接吻…は語彙が古いか。唇と唇を合わせるアレのこと、言ってるのよね？

あっくんを見ると、さして騒ぐほどのことでもないと言わんばかりの素振りで、変わらず足元を確認しながら歩いている。

「なんて？　キス？」

私はできるだけ平静を装って、普段通りの軽い感じで訊き返そうとした。でも、実際に声を出してみると少し上擦った声になっていて、恥ずかしかった。

「うん。キス」

あっくんがぽそっと答える。やっぱり、キス。

私はもうひどく動揺して、胸をドキドキさせていた。

キス…キス…初めての…キス。

あっくんのことを、目を丸くして見上げて口をパクパクさせている。きっとそうしているに違いない。恥ずかしい。でも、それ以上に…。

「えっと、えっと…ム、ムリだよぉ」

もじもじして小声でそう返してしまった。うつむきがちに見上げるとあっくんも私を見下ろしていた。
「どうしても？」
少し寂しそうな表情と口調に胸がドキッとする。そんな顔するの反則だよ！
「えっと、うんと…」
指先をいじったり、目線を逸らしておどおどしたりで、私がはっきりしないでいると、あっくんがゆっくり顔を近づけてきた。そしてゆっくりと私の顔に近づいてくる。
キ、キス！　するの？！
もう頭の中がごちゃごちゃで、心臓はバクバク暴れてて、全身は緊張でガチガチに強張っていた。
ど、どうしよう…キス、キスか…あっくんだからいいかなぁ？　いいよね！　私だって、ときどきあっくんとキスすること想像するし、それが実現するんだからいいことだよね？　あっくんがキスしたいんだし、私もしてもいいかなって思っているんだからいいよね？　でも、くちびる、大丈夫かな？　荒れてガサガサになってないかな？　こんなことならリップ塗っとけばよかった…。
そんなことを考えながら意を決した私は、泳がせていた目を強く瞑り、唇を突き出した。あっくんと私の唇の距離がゆっくりと縮まっていく。まぶたがピクピクして、耳が真っ赤に熱くて。傍から見たらものすごくカッコ悪い光景だろう。
それでも今は、頭の中はキスのことでいっぱいだ。目を瞑っていても、顔のすぐ前にはあっくんの顔があるのがわかる。
あっくんとだからいい。あっくんとだからキスをする。これは嬉しいことなんだ。
――でも…。
一生懸命あっくんの願いを叶えようと、そして自分の夢を叶えようと頑張ったが、唇と唇が触れるか触れないかの間際、あっくんの体温を感じたとき顔をすっと後ろに引いてしまった。

「や、やっぱりダメ…あぁぁぁ、バカバカバカァ」
真っ赤な顔を両手で覆い隠し、これでもかってくらい強く横にブルブル振った。パタパタとポニーテイルが揺れる。
「ゴ、ゴメン。オレが悪かったよ…」
あっくんが慌てた様子で必死に謝ってくる。
やっちゃった！　あっくん、きっと落ち込んでる…。
指の隙間からそっとあっくんの表情を伺うと、思った通り落ち込んでいて、おどおどしている。
「ゴメン、ムリさせて。キスは…イヤ、だよな」
「ヤダ！　ちがうの！　そうじゃないの」
私は思わず大きな声で否定した。あっくんが驚いた顔をしている。
「あっくんのことは、その…好き、だよ。あっくんといると楽しいし、それに…私だって、あっくんとキ、キスすること妄想したりするし…そりゃもう、口をつける程度じゃなくてもっと濃くて、すごく長いキスをするの」
私は何を言っているんだろう？　弁解のつもりがなんか暴露になっちゃってる。あぁ…あっくんがポカンとした顔で私のことを見てる。恥ずかしい。
それでもあっくんが何か言おうとする前に私は言葉を次々と並べたてる。あっくんにツッコミを入れる隙だけは一切見せるものか。
「だからだから、キスはイヤじゃないの。むしろ大歓迎。でも…」
そこで少し言い淀んだ。顔を横に向けて、指をいじる。
「でも？」
あっくんが私が続きを話すのを待っている。私は上目遣いでそっと見上げた。
「わ、笑わないでね…」
「ぜ、絶対笑わない！」
「うん…私、キス…初めてだから…」
あっくんは笑わなかった。笑わなかったけど呆気にとられたような顔で私を見ている。

「ファーストキス！　初めてのキスになるの！　それなのにいざキスするとなると、私、頭が真っ白になっちゃって、これじゃキスしても思い出になんないし、それにこんなぎこちないのキスっぽくないし…もっと素直なキスがしたいし…」
　なんだか途中から言ってることがムチャクチャになっている。思っていることがうまく伝えられない。自分の胸中をあっくんに知ってほしい。私が嫌がっているのはあっくんでも、あっくんとのキスでもなくて、キスをするときの自分が嫌なだけなのに、ただそれを知ってほしいだけなのに、呂律が回らないし、ぴったりな表現が浮かんでこない。
　きっと、あっくんは勘違いして自分のキスの仕方が悪いんだとか思ってる。そうじゃないのに…。
　うまく伝えることのできない悔しさから、私は気づかないうちに目を真っ赤にして涙を溜めこんでいた。
「お、お願い。私のこと信じて…私、あっくんのこと好きだから…あっくんとキスしたいから。だから…」
　私が涙ながらに懇願し始めたことに驚いてあっくんが慌てて慰めてきた。
「わ、わかった。わかったから、泣かないで」
「ホント？」
　私が涙目でキッと睨みつけるようにして訊き返すと、あっくんは少したじろいで困った顔をした。
「い、イヤわかったのかなぁ…で、でも、オレとのキスがイヤなわけじゃないのはわかったから。…アレ、い、イヤじゃないんだよな？」
　あたふたするあっくんがどんどん自信なさげになっていくのを見て、つい吹き出してしまった。いつも通りのあっくんだ。やっぱりこうじゃないと。
「あはははは。あっくん、慌てすぎ。そうだよ、合ってるよ。でも、８２点。惜しかったねー」

私がいたずらっぽく笑って見せると、ほっと一安心してあっくんが言い返してきた。
「ふづきの言ってることがわけわからな過ぎなんだよ」
「そう？　でも、一番わかってほしいこと、知ってもらえたからいいよ」
「なんだよ、それ？　それに、泣くのズルイって。ホントに焦ったって」
「な、泣いてたって！　あ、イヤ、コレはその…」
またあっくんに弱い所を見せてしまった。あっくんの前で泣くのはこれで二回目になる。恥ずかしい――
この短い時間に何回“恥ずかしい”って思っただろう？　もう全身汗だくだ。
「まるでふづきの弱みを握ったオレがそれを盾に無理矢理に迫って、ふづきが泣く泣く従わざるを得ない状況、みたいじゃないか」
「そ…それは思い込みの激しい人だな。ははは…」
「でもまあなんて言うか、なんかスッキリしたな」
隣で思いっきり伸びをして、声を張り上げる。私はというと、目に溜まっていた涙を一生懸命拭っている最中だ。
「あっくん、今日ずっとそわそわしてたけど。コレのことだったの？」
「うん？　ん…」
あっくんは答えないで、空に顔を逸らした。でも、きっとキスのことでずっとそわそわしていたんだ。前からキスしようと決めて、どこでするかも考えていて、で、いざキスの時が近づいてくるとだんだん緊張してきて、だからそわそわしていたんだ。そう考えると断ってかわいそうなことしたな。
でもそれより、あっくん、かわいいなぁ。
私は空を見上げているあっくんの腕にしがみついた。
「な、なんだよ？　ビックリした」
「なんでもないよ。…ありがとね」

「なにが？」
「だからなんでもないって」
あんなにキスしたがっていたのに、私のことを想ってショックを隠してくれている。まるで何事もなかったように振舞ってくれている。私の我儘に付き合ってくれる。やっぱりあっくんは優しい。
真っ暗になった土手の上をあっくんの腕に寄り添ったまま歩く。それはそれはとても居心地のいいひとときだ。たまにはこんな帰り道をしてもいい。あっくんにしてみれば甘酸っぱい計画が失敗したわけだけど、まあいっか。考えるのもめんどくさい。愛なんてきっと頭を悩ませるためにあるものじゃないし。
土手のふもとのサイクリングロードで中学生くらいの男女が花火をしている。
「ねえ。今度、私たちも花火しようよ」
「花火か…いいなぁ。今からでもやろか？」
「ええ？　今日はもうおなかすいた」
「じゃあ、クレープ食べに行こうぜ」
「だからもう遅いんだって！　早く帰らないとお父さんに怒られちゃう」
いつもとは少し違う帰り道は、たちまちいつも通りの帰り道になった。遠くで夕蝉が鳴くのを聞きながら少し涼しい夏の夜を、ほんわり幸せな気持ちで並んで歩く。

（後書き）

esora　creations

http://esora2011.web.fc2.com/index.html

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8353y/

ほろ酔いルーシー Break Time

2011年11月24日23時57分発行